

天地を翔ける



シナリオ・編集 帰家圭吾
まんが 石田あいと
タイトル題字 座主有香

目関図

馬氏



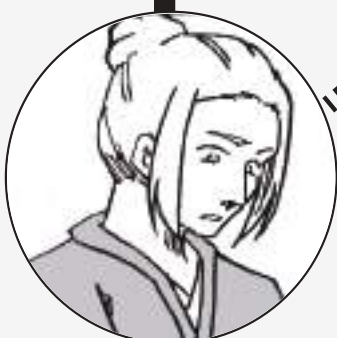
えま ときもり
江馬時盛

親子

兄弟



えま てるもり
馬輝盛



えま のぶもり
江馬信盛

武田氏



たけだしんげん
武田信玄

家臣



おぶ さぶろうひょうえのじょう
飯富三郎兵衛尉
やまがたまさかげ
(山県昌景)

懇意

人質

懇意

上杉氏



うえすぎけんしん
上杉謙信

ライバル

人物木

江戸

三木氏



みつきよりつな

三木自綱

あねがこうじよりつな

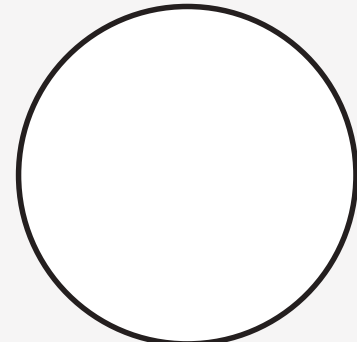
(姉小路頼綱)

家臣



うしまるちかまさ

牛丸親正



あそや なおもり

麻生野直盛

親子



あそや よしもり

麻生野慶盛

江戸

同盟

織田氏



おだ のぶなが

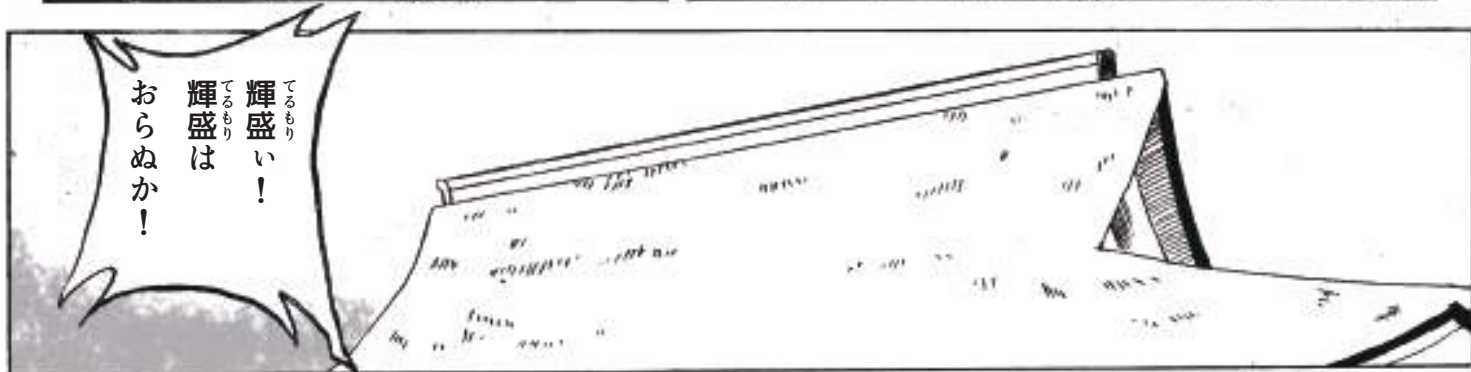
織田信長



ひだのくに
飛驒国でも守護・京極氏の
権力が弱まり、各地の豪族
が力をつけてきた



時は戦国時代
室町幕府は衰退し、
全国各地で戦国大名が台頭



輝盛い！
輝盛は
おらぬか！



どうしましたか？
父上

江馬輝盛



輝盛い！



お言葉ですが
ちちうえ はんだん
父上は判断を
みあやま
見誤っております

この先、
うえすぎがた
上杉方につくべきで
ございます



なぜ
何故、ワシの
言うことが
聞けぬのじゃ

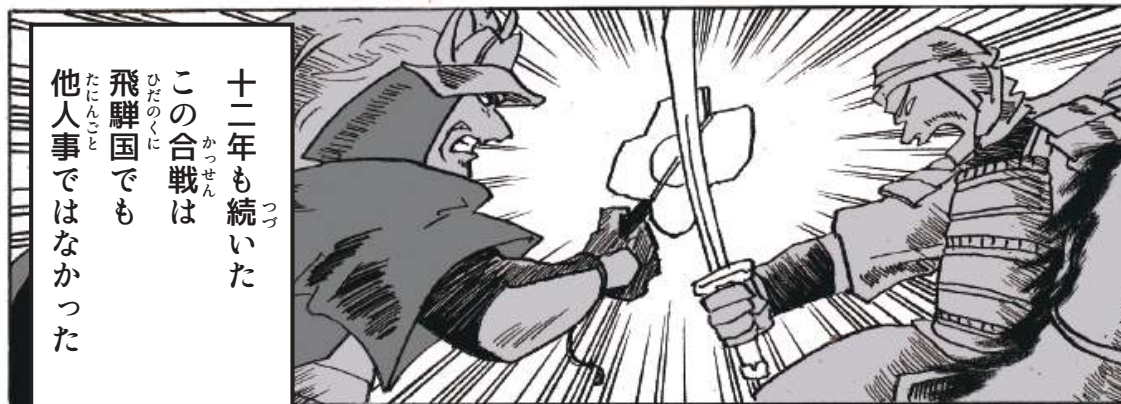
十五代当主
江馬時盛



なにを！

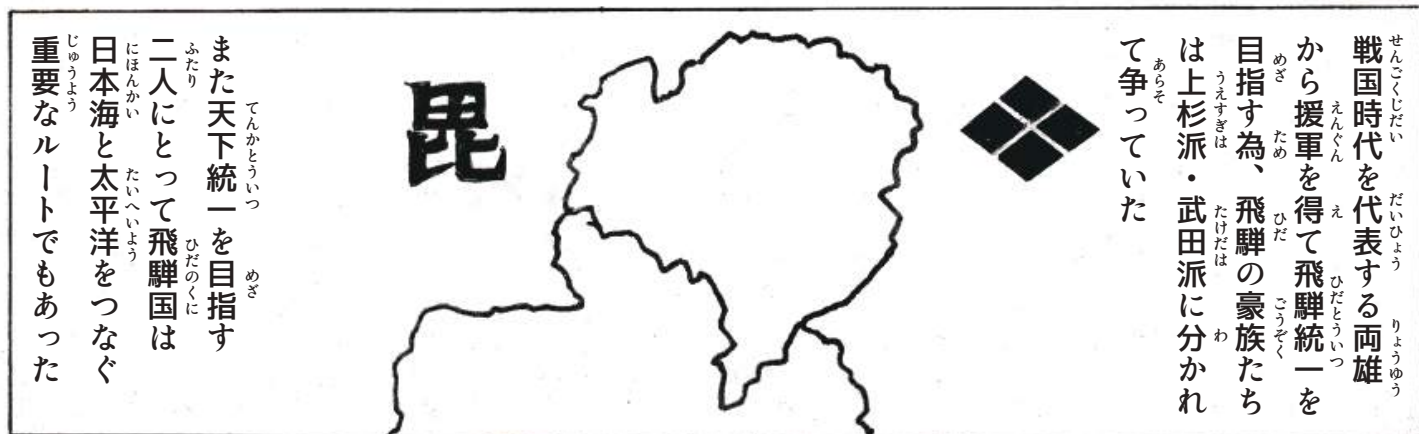
ちちうえ あにうえ
父上、兄上、
おやめ
ください

二男
江馬信盛



十二年も続いた
この合戦は
飛騨国でも
他人事ではなかった

天文二十二（一五五三）年
越後国の上杉謙信と甲斐国の
武田信玄とが戦を始めた
世に名高い
川中島の決戦である



戦国時代を代表する両雄
から援軍を得て飛騨統一を
目指す為、飛騨の豪族たち
は上杉派・武田派に分かれ
て争っていた

毘



また天下統一を目指す
ふたり
二人にとって飛騨国は
日本海と太平洋をつなぐ
重要なルートでもあった

ちち
ときもり
父・時盛は
たけだは
武田派だったが一



てるもり
うえすぎは
輝盛は上杉派だった
おな
うえすぎは
同じ上杉派の三木氏と
て
く
たびたび
手を組み度々、時盛と
こぜ
あ
小競り合いをしていた

えいろく
ところが、永禄七
(一五六四)年



いじょう
うえすぎ
これ以上、上杉の
す
好きにさせん

飯富三郎兵衛尉
(後の山県昌景)

たけだ
おぶ
武田の飯富三郎兵衛尉(後
めいしやう
やまがたまさかげ
の名将・山県昌景)が飛騨国
へ攻めてきたのである

もはや
これまでか

たけだ
してんのう
武田四天王と呼ばれる
おぶ
あいて
飯富相手には、輝盛も
く
屈するしかなかった
ちち
ときもり
父・時盛は武田氏への
ちゅうせい
しめ
忠誠を示す為に、二男
のぶもり
ひとじち
信盛を人質として、武
だ
けんじやう
田に献上したのである

あと
ねが
後はお願
いたします

ふほんい
これで不本意ながら時盛と
とも
たけだし
共に武田氏に下るのであった



よくとし
翌年――

か
てき
勝ち鬨を
あげよー！



おう
ッ！
応ーッ！

たけだし
えまし
武田氏は、江馬氏を先陣
にして越中(富山県)に
えつちゆう
とやまけん
攻め入り松倉城主・椎名
せい
まつくらじやうしゆ
氏を撃破
げきは





しかし父・時盛は
輝盛の躍進を快く
思っていなかった



輝盛・時盛は戦功を挙げ
武田から中地山（富山市
大山町）七万石を任せら
れるようになった

ありがたき
幸せ



元龜四（一五七三）年
武田信玄が病死

信玄は武田家の衰退を
恐れ、自身の死を三年
間隠そうとしたが



あやつは、まだ上杉に
内通しているかもしれぬ

時盛は輝盛の
ことを認めて
いなかった



しかし戦国時代は
大きく動いていた
織田信長の躍進である

同年、將軍足利義昭を追放し
室町幕府を滅亡させた

織田信長



輝盛は誰よりも早く信玄の
死を伝え、上杉へ寝返った

惜しい人を
亡くしたものだ

天正三（一五七五）年、
長篠の戦いでは火縄銃を使い
無敵と呼ばれた武田騎馬隊を圧倒

三年後には上杉謙信も
亡くなり信長を止める
者が誰もいなくなった

謙信公が亡くなった今
織田方につかねば

戦国時代において、小国の武將は
強い大名につくことで自分の領土
を守っていたが、輝盛はそのパ
ラ
ンス感覚が非常に優れていた

しかし江馬家の存続の為
とはいえ寝返りを繰り返
す輝盛と父・時盛との言
い争いは絶えなかった

そうじゃ
のぶもり
信盛を
返してもらおう

人質として武田に出された
二男・信盛は数々の功績を
挙げる武將に成長していた

兄上は嫡男で武勇にも
優れておりますし
適任だと思いますよ

兄上に逆恨み
されそうだし

私は結構です

飛騨に呼びよせるが――



しかし泣き落としで何とか説得

もうお前しか
おらぬのじゃ

わかりました
分かりましたので
落ち着いてくだされ



時盛の弟、麻生野直盛の子
慶盛に家督を譲ろうとするが

やはり本家で
継ぐべきかと...

また断られる



そして事件は起きる

きやー!
誰かおりませんかー



父上、何故そこまで
ワシを認めんのじゃ

お互いの不信任は
頂点に達してしまつた



輝盛様

それを知つた輝盛は



殿!
敵襲でございます

おのれ
輝盛!



その後、洞城に攻め入り
麻生野慶盛を自刃に追い
込んだ



江馬家十五代当主
江馬時盛を暗殺してしまう







みなみひだ
南飛騨を支配している
みつき
三木（姉小路）氏である

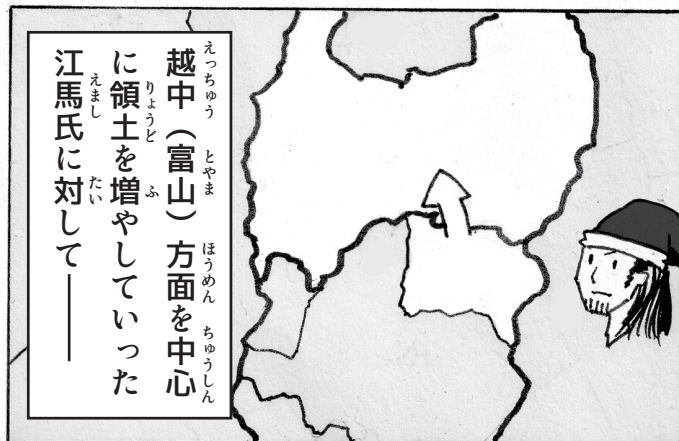
ひだ
しかし飛騨の統一には
かべ
おおきな壁があつた

三木自綱
(姉小路頼綱)



じだい
この時代、仁義だけでは
じんぎ
生きていけぬのじゃ！

て
どんな手を使おうとも
ひだ
必ず飛騨を統一してみせる



えちゅう
越中（富山）方面を中心
りょうど
に領土を増やしていった
えまし
江馬氏に対して——



みつし
三木氏は、古川盆地を治めて
ふるかわぼんち
いた公家の姉小路家が分裂し
あねがこうじけ
衰退したのに乗じて、姉小路
すいたい
家の乗っ取りに成功
けの
せいこう



みつきよりつな
三木自綱は、織田信長と
おだのぶなが
おなじく斎藤道三の娘を妻に
むすめ
むか
迎えたことで、相婿となり
のぶなが
信長との繋がりを強め、
せりよく
勢力を拡大していたのだ
かくだい



みつし
三木氏は飛騨地内の領土を
ひだちない
ちやくじつ
着実に増やしていった



あけちみつひで
明智光秀の謀反により
のぶなが きゆうせい
信長は急逝

じんせいごじゅうねん
人生五十年――



せんざいいちぐう
しかし千載一遇の
チャンスがやってきた
てんしょう
天正十(一五八二)年の
ほんのうじ
本能寺の変である

てき
敵は本能寺に
あり!



いざ
出陣じゃー
しゅつじん

どうねんじゅうがつ
同年十月、
てるもり
輝盛が挙兵

ひだ
飛驒を統一する
には今しかない
いま

のぶなが
信長の死で全国の
せいりよくす
勢力図も大きく
へんか
変化した



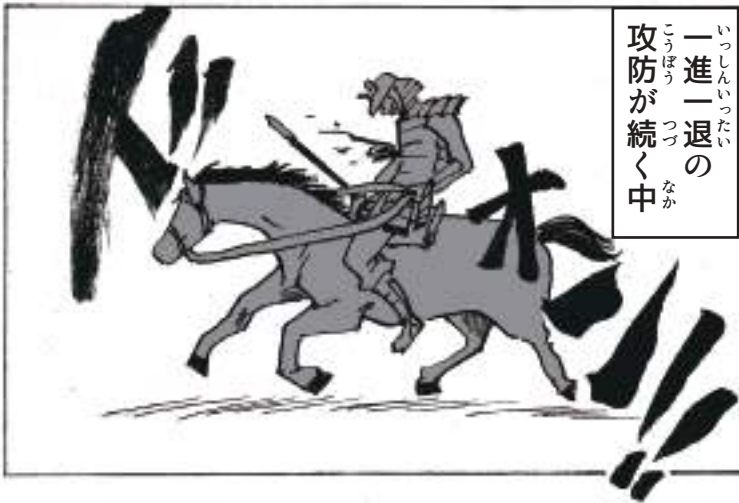
せんこうじき
千光寺記には
こうき
こう記されている

きよう こつがらひと
器用骨柄人に傑れ、
まこと
誠に武勇に達すると
たつ
いえども仁義を知らざる
けんき
血氣の勇者なり
けつき
ゆうしや

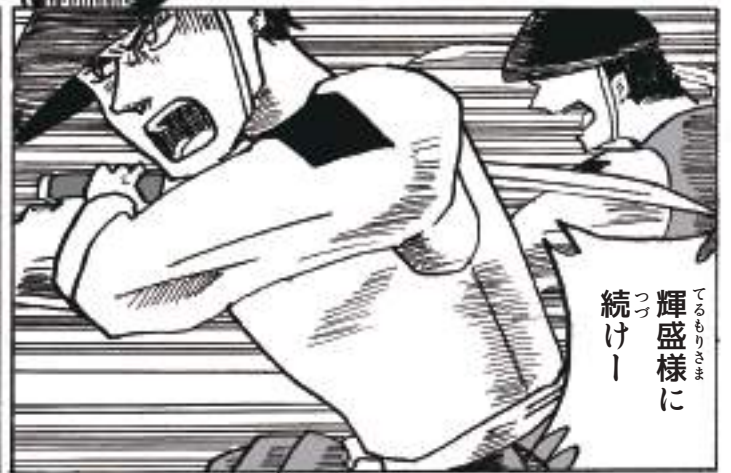
ようかまち
八日町（高山市国府町）
りようゆう
にて両雄が激突



この戦いは「八日町の戦い」と呼ばれ、飛騨統一を目指す江馬氏と三木氏が激しく争った後に「飛騨の関ヶ原」と称された



一進一退の攻防が続く中



輝盛様に
続けー



もはや
これまでか...



形勢が
一気に傾く

輝盛様が
撃たれたぞー

全軍
退却ー



うしまるちかまさ
牛丸親正だ

こわっば
小童、
ななん
名を何という？



かつ
かつ
覚悟しろ



えま てるもり
江馬輝盛
ようかまち
八日町にて死去
しきよ



よし、貴様あなたにこの
たいしょうぐひ
大将首をくれてやろう



えましじゅうろくだい
これにて江馬氏十六代の
れきし
歴史に幕を閉じることと
なった
ひだとういつ
戦国時代に飛騨統一を
めざ
目指した一人の戦国武将
ものがたり
の物語である



たいきやくちゅう おおさかどうげ おお
退却中、大坂峠で多くの家臣が輝盛の後を追って自害
のうみん
じゅうさんにん なきから ほうむ
農民たちが十三人の亡骸を葬ったことで、地元では
じゅうさんぼどうげ
「十三墓峠」と呼ばれている